第一話「柔道部、剣道部、美術部」

まだ肌寒い春の、金曜日の朝のことだ。彰は恋人の玲奈と一緒に通学路を歩いていると、ふと彼女がデートに誘ってほしそうにしている気配を感じた。

次の瞬間には、それが気配ではなくて明らかにわかった。なぜなら、誘ってほしいときの玲奈は急に口数が少なくなり、握っている彰の手をすこし強めに握るからだ。このときも彼女はきゅっと指を締めつけて彼の手を握った。長身にゆたかな黒髪を垂らした熱心な剣道部員の手はやや硬いが、あまり熱心でない柔道部員の彰の手よりは柔らかい。

たいていの場合、彼はその手を握り返して、玲奈の望み通りにデートに誘う。といっても彼はそう常にデートがしたいわけではない。なにしろ彼女の求めるデートというのは、一人暮しをしている彼の部屋でするセックスのことなのだから。

どちらかといえば、彰は玲奈の機嫌を損ねるのが嫌で手を握り返し、セックスをしているのだった。特に最近はそうだ。彰は、玲奈が彼とのセックスで感じるほどには、気持よさを感じられていない。勃起はできるけれど、射精ができないのだ。

もっともそんな事情は知らずに彼を愛している玲奈は、望んでいた通りに誘って、つまり手を握り返してもらえるといつも喜んだ。自分から「いつにする?」と言い、だいたい翌

日の土曜日をデート（セックス）の日に挙げる。彰が「いいよ。じゃあその日にしよう」と言う。玲奈は機嫌が良くなる。こうして週末のデート（セックス）の予定ができあがる。

面倒なやりとりではあるものの、彰は玲奈の整った顔がそれで笑顔になるのが嬉しかった。彼は玲奈のことが好きだし、彼女も彰のことが好きだから。

しかし今朝、彰は玲奈の手を握り返さなかった。いつものように、剣道部の彼女の手が彼の手を強めに握る。が、彰はその手を握らせるままにしている。べつに痛くはなくて、むしろ心地よく揉まれるような刺激が続く。

何も反応が返ってこないので、玲奈はぱっと目を見開いて彼をみつめる。

彰は気まずそうに目をそらす。デート（セックス）の誘い、いや「私をデート（セックス）に誘ってよ」という誘いの誘いは、断られたのだ。

「だめかな？」

「ああ……今週はちょっと、うん」

「……そっか。大丈夫。気にしないで」

「うん」

玲奈はそれ以上彼の手を握りこむことはせず、ただ恋人つなぎのままにしていた。

彰は彼女に「気にしないで」と言ってもらえて内心ほっとした。が、なんでだめなのか聞

いてくれてもいいんじゃないか、とも思った。しかし、じゃあ聞かれてどう答えるか、まさか「最近セックスが合わなくて」と言えるものでもないし、なかなか難しい話なのだった。

ふたりは校門を通った。朝の練習がある玲奈は「じゃあまた帰りにね」と言い、武道場のある棟へ歩いてゆく。彰は「うん。頑張って」と言ってそのうしろ姿を見送る。

彼の所属する柔道部は人数が少ないし、さほど熱心な部ではない。一方、玲奈の剣道部は大きな大会で何度か表彰されるくらいで、彼女自身も実力があった。だから、ふたりが朝一緒にいられるのは校門までだった。クラスも違う。

「はー……」

朝七時すぎの校舎に入り、人のいない廊下を彰はとぼとぼと歩く。月曜日、水曜日、そして金曜日は、彼は眠たかった。練習のある玲奈にあわせて自分も早く起きるからだ。今ごろ彼女は他の部員と一緒に、稽古に励んでいるのだろう。柔道部でも朝練をしようかな、と前に一度言ってみたことはあるものの、数人しかいない他の部員の反対にあってやめた。

武道場は柔道部と剣道部の兼用だが、だいたいは剣道部が使っていた。柔道部は自他ともに「ゆるい部活」と認めているものの、いちおう毎回決まった練習をそれなりの強度でこなす。が、どだい剣道部とは人数も実績も意欲もちがう。剣道部はどうしても武道場を独占的に使う必要があるのだし、一方で柔道部はそうではない。自然と柔道部の方でも、武

道場の使用の偏った割り振りを受け入れるようになっていた。

この日も、彰は気だるげに教室に向った。べつに早起きして一緒に登校するのが嫌なわけではないけれど、眠いのは生理的なものでどうしようもない。また彼の眠りの不足は、単に時間が短いというだけではない。

（……結局、この前もイけなかったな）

彰は前回の玲奈とのセックスを思い出す。ふたりの間ではデートとは実質的にセックスのことだったし、それはむしろ玲奈の方がしたがっていることだった。玲奈は彰にされるのが好きなのだ。

しかし彰の方では違う。彼は玲奈と体の相性というか、嗜好の相性が合わないことに悩んでいた。少しは玲奈の方からもしてほしい、と思っていたが、それが言い出せずに、解消されない性欲を溜めていた。つまり彼は欲求不満であった。

「大友くん。おはよ」

「あ、高橋さん……おはよ」

まだ始業には早すぎる教室に入ると、なぜか彰より早く来ている女子生徒がいた。同級生の高橋美弥だ。

美弥は美術部で、度の弱い黒ぶちの眼鏡をした背の低い女子だ。おとなしい文化系なが

ら、意外と人好きのする一面があり、色々な生徒と話しているのを見る。
彼女は手をひらひらと振ってみせるくせがある。それがかわいいと一部の男子からは無邪気にほめられ、少数の女子からは陰口を叩かれている。もっともこの少数は常に誰かの陰口を言っていたから、まともに取り合う生徒はいなかった。
実際、彰から見ても美弥はかわいかった。あの玲奈は高い身長にまっすぐ流れる黒髪の似合う美人だが、この美弥はちょうどそれとは真逆の小動物みたいな印象の子だ。黒髪のボブ・カットに赤い眼鏡をかけ、ぴっちりと制服を着こんでいる。
「今日も彼女さん朝練なの？　大変だねー」
「そうでもないよ。もう慣れたし……高橋さんはなんでこんな早いの？」
美弥は自分の席から彰に体を向けている。さっきまではスケッチブックに絵を描いていたようだ。細いボールペンで、美少年の絵、それをデフォルメした絵、書きかけのカリグラフィ、花、小物などが描いてある。ここ二階の教室の窓から見える、咲きはじめの桜のスケッチも描いてあった。
彰は自分の席に座り、美弥の手をちらっと見る。その手は彼の手とも、玲奈の手とも違う。畳に擦れることもなく、竹刀を握ることもない、白くて小さくて柔らかそうな手だった。

彼女はスケッチブックを閉じると、細い指でボールペンをくるくるともてあそびはじめる。そういうしぐさに慣れているのか、彼と話しながらでも手の動きは滑らかだった。
「ふーん。でもなんか疲れてそうだけどな……わたしはあれだよ、今日の、ほら、保健室のあれ」
「あっ」
彰はその「保健室のあれ」をすっかり忘れていた。彼と美弥は部活こそ違うものの、同じクラスで、そして同じ保健委員である。今ふたりが多少親しく喋っているのも、もとは保健委員の仕事がきっかけだ。
今日、ふたりは養護教諭から保健室の物品の整理を手伝うように命じられていた。作業自体は放課後にとりかかることに決めていた。が、量が多いので、教諭からはいつでも来てくれていいと言われている。今日で終ればよし、終らなければ数日かけてやるということだ。
「ごめん、忘れてた。先生って朝からいたの？」
「あはは、まだちょっとやっただけですから。先生はいなかったけど、教務室で保健委員ですって言ったら開けてくれた」
「そ、そうなんだ……朝からやるって真面目すぎない？」
「あー……ま、そのへんはほら、早起きしたってことで」

美弥は得意げな顔をしてみせるが、
「……いちおう言っとくけど、借りとかないからね？　あとで俺もやるんだし」
「あら」
そう彰に言われ、ちろっと舌を出して笑う。
もっとも、彰はそう言いながら、若干の申し訳なさを美弥に感じた。あとから来た自分ですら眠たいのだ。朝から保健室で作業をしていた美弥はどれだけ早く起きたのだろう？　べつに朝は一緒にやる約束はしていなかったとはいえ、これは要するに気の利かないやつだと思われてしまったかもしれない。そんなことを考えた。
（放課後は俺も頑張ろう……）
ふたりはそれからしばらくお喋りをしていた。やがて男女の生徒がちらほら教室に入ってくると、彰と美弥はそれぞれ同性の友達と話し始めた。